

の概要を紹介した。

顎関節二重造影法は単純造影法と較べると、上下関節腔や関節円板などの解剖構造のより詳細な観察が可能であり、関節円板の前方転位や穿孔などの軟組織変化を診断したり、治療方針の決定に際して有用と考えられる。

2) 最近経験した耳下腺腫瘍 (多形性腺腫) の2症例

林 孝文・坪田 雅代 (新潟大学歯科)
中山 均・佐々木富貴子 (放射線科)
中村 太保・伊藤 寿介

従来より耳下腺腫瘍の画像診断には Sialography が行われてきたが、最近では CT や US も一般化しつつあると思われる。今回は、病理診で多形性腺腫と診断された2例について、施行した Sialography, CT, US の各診断技法の特徴について整理するとともに、2例に対照的な CT 像が得られた要因について病理組織学的な面から考察を加えた。

2症例は Sialography や Sialo-CT によって耳下腺体内の良性占拠性病変であることが示唆される所見で共通であったが、造影 CT にて一方は周辺部が造影されて内部は low, 他方は一様に耳下腺と同等な造影性を示した点で対照的であった。この差は病理組織学的な細胞構造上の相違が CT 上に反映したものと考えられたが、CT で嚢胞性病変を疑わせた前者が、US により内部の実質性を指摘され、これが摘出物とよく合っていたことは、US が CT の限界領域を補える可能性のあることを示唆している。

3) 下顎骨に発生した骨肉腫の1例

坪田 雅代・林 孝文 (新潟大学歯科)
中山 均・佐々木富貴子 (放射線科)
中村 太保・伊藤 寿介

今回、我々は軟骨様組織形成を主体とする下顎骨骨肉腫を経験した。

患者：19才、男性。下顎左前歯、左下口唇のしびれ、臼歯部歯肉の腫脹、疼痛を主訴とし、既往歴、家族歴共に特記事項なし。

plain CT, enhanced CT により、tumor の進展はある程度把握されたが、その周囲組織への invasion の有無や、内部性状の鑑別が問題となった。エコーにより、耳下腺との境界や性状が予想された。MRI により tumor の進展がより鮮明になり、周囲組織への invasion の有無も予想された。骨髄組織については、CT, MRI 共に病変の存在を示したが、どのような病変かについては、

わからなかった。

今回、我々は MRI を初めて画像診断にとり入れてみたが、顎顔面領域でも大いに有効であったので、今後は CT, エコーと共に MRI も大いに活用して総合画像診断を進めて行く事が必要だと思われた。

4) 新潟県立がんセンター画像診断科の紹介

新妻 伸二 (新潟県立がんセンター)

62. 5. 1. 全面改築され移転した新潟県立がんセンターでは、中央放射線部の中に画像診断科、放射線治療科、核医学検査科の3部門がある。

このうち今回は、主として画像診断部門の機械の構成、運用面について述べる。

省エネルギーのための操作廊下、電算化、フィルム自動搬送システムや、それを取り巻く種々の工夫がされている。X線テレビ4台、CT 2台もグレードアップされたものだが、近々 MRI や CR の導入も予定されている。また各機器に付属する記録装置として、光ディスクが付属しているが、フィルムディジタイザーも初めて購入されて、将来の PACS 化に少しずつ備えている。

しかし一方、近代化の歪みというか、冷暖房の調節の不良や、ドアのストッパーなどの小さな悩みも少なくない。

5) 右放線冠に梗塞病変をみとめた一過性痴呆の1例

関 耕治・渡辺 浩之 (新潟大学脳研究所)
湯浅 龍彦・宮武 正 (神経内科)
田中 政春 (三島病院)

症例は64歳女性、活動的性格であったが、夫入院後S62年7月27日朝より物忘れ、言動異常あり、亜急性に進行し9月1日三島病院に入院、神経学的所見で、着衣失行、見当識障害、注意力散漫、了解遅延、感情鈍麻、意欲の低下あり、知的機能では記憶力、記銘力、計算、書字の各障害を示し(長谷川式8点)、検査で血中アンモニア軽度高値、髄液総蛋白 114mg/dl、脳波で除派を認めたが、X-CT 異常なし。MRI にて右放線冠を中心にT2の延長病巣を認めた。脳代謝賦活剤継続していたところ回復、TGA, Hysterie, 肝性脳症などが鑑別になったが MRI 形態および臨床経過から梗塞性病巣と考えた。なお、病状回復後10/20の¹²³IAM-SPECT では脳局所・全体とも血流の低下は示されなかった。